
デンジャラス・ガール

空野 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デンジャラス・ガール

【Zコード】

N4773B

【作者名】

空野葵

【あらすじ】

俺、柊飛鳥は高一の不良学生。身長は175cm。容姿もそこそこだと思ってる。もちろん喧嘩には自信があるし、ポリスに世話になつたことも一度や二度じゃない。だが、ある冬の日に俺が拾つた女の子。そいつは、ヤザより危険な奴だった……！

第一難 最悪の出会い

女の子が、倒れてた。

雪の降る、冬の日だった。

ソファーに寝かされている少女を前に、俺、ひいらぎあすか 梶飛鳥は存分にため息をついた。

「なんだよ、こいつは……」

何故か家の前の公園に倒れていた少女を、雪の中見捨てるわけにもいかずひとまず家に連れて来たが、驚いたことにそいつは金色の髪をしていたのだ。

日本人じゃ……ねえよな。

暖房をフル回転させていためムツとしたリビングで、俺はもう一度、ため息をついた。

何で、せいぜい十一、二歳程度に見える少女こじつ があんなところで雪に埋もれてたのか。たまたま俺が見つけなければ、間違いなく死んでいたはずだ。

俺は、その子に近づき、金の髪を隠すようにしっかりとくぶられていた白いフードを、何となく手に取る。裏を見ると、かすかに“made in Keiua”と読めるタグが付いていた。

「キー……ルア?」

そんな国、あつたつけ？

ひとしきり悩んでみても、そもそも頭に入つてないのだから出て
くるはずもなく。俺があきらめて世界地図を探していると、ドアの
横にある電話がけたましく鳴り響いた。

こんな時に！と舌打ちしながら受話器を取る。

「よお、元氣かあ？」

「叔父貴……」

「いやー、すまんなあ。早く連絡しようと思つてたんだが

飄々とした声に、忘れていた怒りがふつふつと湧き上がる。

「今どこにいるんだよー？ まつたく、毎度毎度俺に一言もなく出
て行きやがって」

「エ・ベ・レ・ス・ト

「……は？」

「Hベリストだよエーベーレースター 世界一高い山の

「それぐらい知ってる……」

頭を抱えたくなるとさ」「の」とだ。叔父は万年放浪癖の旅行家で、
たまに日本に帰つて来ても、すぐフランツビンカへ行つてしまつ。

それは、両親が離婚して荒れに荒れていた俺を引き取ってくれてからも、全く変わることはない。

……確かに前はナイアガラだった。
それよりも。

「叔父貴、また俺のマンガ盗んでっただろー。」

「この悪行が許される訳がない。しかも五十冊もだー。」

「ケチケチするなよー禿げるぞお？ それより、何か変わったことはねーか？」

あーもう、何でこのおっさんほんまにこのトンンショーンなんだよー？

「ハゲねーよー！ 別に変わったこととかも……」

特には と言い掛けて、そこで後ろを振り返った俺は愕然とした。

何で今まで忘れてたんだ！？

「ちよつ、ちよつと待つてくれ叔父貴ー 今、俺の後ろこ……！」

「あ？ 何だ聞こえねーぞ。おっともうケータイ電池切れだ。じゃーな」

「え、ちよつと待

ピッといつ電子音がして、無情にも電話が切られる。先程までの騒音が消え、沈黙が漂つた。

「…………」

俺は力の限り酸素を吸い込み、怒鳴りたいのを必死で抑えた。落ち着け、俺。こんなことにはいらん体力使うな、俺。

その時、後ろでかすかに女の子が身じろぎした気配がして、俺は急いで近寄った。田覓めたかと思ったが、相変わらずぐつたりしていて意識はないようだ。

息遣いが荒く、痛々しい。

「ち……俺らしくもねえ」

喧嘩で名を馳せたこの俺が、女の子を介抱してるなんてな。

俺は今日何度田かも分からぬため息をもう一つつくと、意を決してもう一度受話器を取った。警察にはあまりいい思いに出はないが、この際仕方ない。早くこの子を引き取つてもうひと息ついたのだ。

誘拐犯に間違えられても困るじ。

そう自分に言い訳しながらゆっくりとボタンを押す。1、1、：

： その時だった。

「Don't move!—」

いきなり背後から甲高い声が聞こえたと思うと、左手を鈍い衝撃が襲う。

「なつ、何だ！ 英語！？」

受話器を見ると、何と深々と小型ナイフが刺さっている。

「うわっ、一体何……」

慌てて俺が振り向こうとしたその時、耳元でカチッという音がして、何かが頭に押し付けられた。これがどういう状況かを理解する前に、反射的に両手が上がる。

毎週のようすにテレビでやつてる、アメリカ産映画の賜物だ。

受話器が大きな音を立てて床に転がった。長い沈黙の中で、背後の苦しそうな呼吸音だけが、嫌に響く。外国人女強盗か？それとも……

「Who... are you?」

鮎？ではないよなさすがに。

「え、えーと」

「Be answer!」

「うわ はいっ、あいむ飛鳥 桜 あ、I can't speak English!!!」

小学生にも鼻で笑われそうな発音で必死に答える。もちろんまだ死にたくない。こんな発音で通じるのかと思つたが、意外にも頭に突きつけられていた銃のようなものが少し緩んだ。

「.....Japanese?」

かされた声で問いかけられる。

「い、Yes, I'm Japanese」

その瞬間、部屋に立ち込めていた殺氣や緊張感が一気に消えたのが自分でも分かった。すぐに後ろでズズッと壁を擦る音がして、俺はそろそろと両手を下ろし、ゆっくりと振り返る。

熱のせいでの潤んだ紫の瞳と目が合った。

思った通り、そこに座っていたのは金の髪の女の子。やはりといふか、何といふか、その手にはしっかりと小型の銃が握られていて。全く、恩知らずにも程がある。

俺は何か言ひてやうと思つて口を開いたが、そこから出たのは自分でも驚くような言葉だった。

「大丈夫か？」

するとちこつちことしたりとしながら俺を見て、泣きそうな表情をした。
そして今にも消えそうな声で呟く。

「すまぬ……ゆるせ」

これが、俺とここいつの最初の出会いだった。

「いや、出会いことこのものおじがましい、最悪の「初めまして」となったのだ。いや、出会いことこのものおじがましい、最悪の「初めまして」となったのだ。

第一難 最悪の出会い（後書き）

初連載です。

飽き性ですが、どうにか完結できるように頑張ります。
ここまで読んでいただき、ありがとうございました！

第一難 衝撃

身長150cm前後、流れのような金色の髪、零れるような大きな紫の瞳、そして雪のような白い肌、小さな紅い唇。

そいつは今、俺の目の前に座っている。……あぐらをかいて。

「いやーすまんかった。ついにわたしを誘拐した奴だと思ったのだ。許せ」

せつときより幾分身体の具合が良くなつたのか、そいつ セーナは、上機嫌で俺の足を叩いた。痛えよ。

セーナはさつき倒れこんだ後、「助けてくれ」と呟いた。だから、俺はとりあえず話だけ聞くことにしたのだ。だが、ずっとこの調子で、なかなか話が進まない。

「案ずるな。ちょっと用事を済ませたら、せつないと出てくでな」

「いや、それよりも、お前の日本語が変」

俺がきつぱり言つと、セーナはかなり不満気な顔になつた。

「何ー? これでも、H口ドクター・ケーいが頭だけは良いDr.Kに一年間みつちりと叩き込まれたのだぞー!」

「知らねーよ! 何だよそのDr.Kって!」

名前からして怪しそうだ。

「大体、お前つて小学生だろ？ 何で銃持つてんだよ。そもそもこの国では銃禁止だぞ」

俺がセーナの右手に握られている銃を指しながら言つと、セーナはガバッと立ち上がり、大声で叫んだ。

「失礼なつ、わたしはもう十四じゃ！――」

ああもつ、俺が一体何したつてんだよ！

+++++

結局、三十分間このよつた押し問答が続き、俺に新しく入つた情報は、セーナの本名がセーナ・ルー・キャンベラだということ、そして何故か追われている身だということだけだ。

どこから来たのか、何故追われているのか、どうして銃を持つているのか……など、肝心なところは言葉を濁す。俺は少しいらいろして、カマをかけてみることにした。

「お前、キールアつて國から來たんじやないのか？」

「な、なぜそれを！」

思つた通りの反応をするセーナに少し安心する。銃を持っていても、やはり子どもだということに変わりはない。

「そのフードに印刷されてたんだよ。『made in Kelu

a”つてな。ま、どこにあるのかは知らねーけど……

おい、もういい加減教えるよ、お前の理由ありの本性とやうを。俺は今すぐお前を放り出したっていいんだよ。だが、それでお前はいいのか？　この日本に知り合いはいるのか？』

齎すよついに言つと、セーナは黙り込んだ。身体が本調子でないのに、この寒空の中に出されるのはさすがに嫌なのだろうか。そんなことを考えていると、ふいにセーナが立ち上がる気配がした。さつきとは打つて変わったような真剣な表情^{かお}で、俺の前に座り直す。

そしてとても少女とは思えない低い声で、とんでもないことを言ったのだ。

「話してもよいが、わたしのことを知った時点でおぬしも一心同体、運命共同体となる。もちろん命を狙われるやもしれぬ。おぬしは命が惜しくないのか？」

皮肉^{ひにく}で、自嘲氣味に話すセーナ。俺は思わず咳き込んだ。

「ちょ、ちょっと待て！　お前、命を狙われてんのか！？」

「ん、言わなんだか？」

「当たり前だ！　さつと知つてたら俺は……！」

「知つてたら？　とつとと降りた方が賢明だろつな

「……」

セーナの冷たく、投げやりな声に、ぐつと詰まる。「冗談じゃない。
こいつが何者かは知らないが、命云々は想定外だ。

大体俺は銃なんか持っていないし、平和の中に生きてる日本人なんだよ！ そうだ、こいつに一言言えばいいんだ。お前には協力できないと、だから早く出てってくれと。

俺が唸うなつている間、セーナはずっと窓の外の雪を見ていた。だがその横顔は、とても子どもには見えなかつた。

そして、俺は決断した。

その時のセーナの顔は、一生忘れられないだろう。

第二難 決心

「やつてせるみ」

俺はセーナに言った。ただ単につまらない日常に飽き飽きしてたのかもしないし、命を狙われるという意味もよく理解できていなかつたせいかもしれない。だが、セーナに出て行けなどと言えないことは、自分で分かつていた。

もううん、一度言つた言葉が戻るはずもなく。

「なに……？」

セーナがゆつくじと振り返つた。その瞳にはあつあつと、「信じられない」と書いてある。

「聞こえなかつたのか？　お前に協力してやるつて言つてんだよ」

疑心の瞳が、驚愕の色に変わつた。

「おぬし、何を馬鹿なことを……。死ぬ」

「あこにへ俺は、この平和な日常をやつしてたからな。ひょうどヒマだし、付き合つてやるよ」

「本氣か！？」

セーナが俺に詰め寄り、襟首を掴む。俺は返事の代わりに、首を

縦に動かした。次の瞬間、襟首が緩んだと同時に、軽い衝撃を感じる。セーナが座っている俺に抱きついてきたのだ。

「もう、もう逃げられんぞ！　おぬしは仲間になつたのだからなー！」

「はいはい、と髪をなでてやると、わずかに肩が震えているのがわかる。そして聞こえるかすかな嗚咽。

こんな強がり言って、変な日本語使って、拳句の果てに銃を持つているセーナだが、やっぱり子どもで女の子なんだなーと、俺は妙に納得したのだった。

+++++

それからしばらく経つて、セーナは俺から離れ、床に座り直した。泣いたのが恥ずかしかったのか、頬がうつすらと染まっている。そして少しづつ、血らのこと話を出したのだった。

「わたしの国、キールアは、ヨーロッパと中東の間にある小さな国だ。つい最近独立したばかりのな。

だが、隣国の支援を受けた軍のクーデターが起こり、政界に属する人間はほとんど殺された」

セーナは、ぐっと手を握り締める。

「ちよつと待て。そんなのニュースでもやってなかつたぞ

俺が慌てて言つと、セーナは何でもないよつこ、「そうか」と言った。

「Jの国は平和だが、他国に理不尽を見てみぬフリをすることがある。

しかし、厄介事に頭を突っ込まないことも、平和を維持する一つの方法だ」

まるで政治家のような発言で、俺は目を丸くする。何か言おうとしたが、セーナは続けた。

「わたしは女学校の寮に入つておつた。まあJは比較的裕福な、政界・財界に通じる子どもが通つておる。そして、クーデターが起つたと同時に、奴らは攻め込んできたのだ。

ひどい有様だつた。わたしと同室の友人も……殺された。わたしは必死に隠れておつたのだが、奴らに見つかり捕まつたのだ」

映画のような話だ。俺は素直にそう思った。セーナには悪いが、まだ頭がついてこきそくにならない。

「奴らの一部は軍のへりを民間機と装い、隣国ではなく日本に來た。そこでしばらく潜伏しようとでも思つたのだろう。わたしは隙を見て抜け出し、逃げ回つてこじろを、おぬしに助けられたというわけだ」

ふんふんと俺は思わず納得しそうになるが、妙な違和感を覚え、考え込む。

普通、こんな女の子をわざわざ日本まで連れて来るか？ただ誘拐するためだけに？

「ちよい待ち。それで結局お前は、キールアつて國で何をしてたん

だ？　何でお前だけ日本に？」

「それは、わたしがキールア国、トーリ・ラゼ・キャンベラー大統領の一人娘だからだ。母上がおらぬから、ファーストレディ役を務めておる。

奴らは父の暗殺に失敗したからわたしを食い物に……ん？　エサというのか？　まあいい。おとりにしようとしたかったのだろう。馬鹿な奴らだ」

「はい？　何か、すごいことを聞いた気が……大統領！？」

「は！？　お前大統領なのか！？」

思わず身を乗り出す俺を、セーナは冷めた目で見た。

「阿呆、大統領の『娘』だ。もちろん父の仕事を手伝つてあるがな。それより、おぬしの方こそ何者だ？　まだ名も聞いておらぬが！」

理解に悶え苦しむ俺を、セーナは覗き込んだ。俺は今更ながらそのことに気づく。

「え？　ああ、悪い。飛鳥、柊飛鳥だ。今は十七歳、学生だ」

しどろもどろに言いつ。

するとセーナは、花が開くよつにふわりと笑い、右手を俺に伸ばしながら言った。

「どうか。アスカ、以後よろしくうな」

「お、おう」

お互いにそつと握手する。いつして俺は、めでたくこの逃走劇に加わることとなつたのだ。

第三難 決心（後書き）

ちなみにセーナの格好は、コート代わりのフードと薄茶色の膝丈までのスカート、短いブーツです。
読んでいただき、ありがとうございました！

第四難 脱出

俺は、怒っていた。

もう許せん！なんだあいつ……ひくしょービツセ俺はしがない日本人だよ！！

事の発端は、握手したあの後、今後どうして追っ手から逃げるかといひ話し合いから始まった。

この日本には、セーナの味方は俺だけだ。俺は警察に行つて保護を頼めばいいと言つたのだが、一笑されて終わる。日本の警察は当てにならないらしい。

まあ、確かに銃もうべく使えないんだから仕方ないか……。

俺はそう納得して、次にこの家にじっとして助けが来るのを待つばいいと言つた。だが、この案も却下される。セーナ曰く、

「もう奴らは近くまで來ておるだらう。見つかるのも時間の問題と いうことだ」

だそうだ。俺はもちろん驚いた。ビックリか、心臓が飛び出でたりとなつた。

それでとにかく、ビ田舎^にある俺の祖父さんの家に非難しようと提案したんだ。だがこいつは……！

「飛鳥、おぬし……足が短いの。その足では、奴らからは逃げ切れぬかもしれぬ」

なんて言いやがった!! しかも氣の毒そうに、ため息までついて。

俺はこれでも長い方なんだよー めつりや傷ついたぞコノヤロー!

そして、今に至る。

「なあ、もういい加減機嫌直さんか。足の長さで人生が決まるわけでもなし」

セーナがおずおずと、やつぽを向いた俺に近づいて来る。つていうかおまえ、フォローする気ないだろ。

俺は、無言でリュックに金や服を詰めた。両手は使える方がいい。横をちらりと見ると、セーナはしょんぼりしたように俯いていた。

…仕方ねえな、そろそろ許してやるか。
そういう思い、俺が顔を上げたその時だった。

ピンポン…ン

呼び鈴が静まり返った部屋に不気味に響く。セーナが、はっとしたように外を見て、急いで立ち上がる。そして、出ようとした俺を

制した。

「何……」

「分からぬか。あやつらだ」

「つそだろー？ 『んなに早くか？』

「静かにしる。『』には秘密の抜け道はないのか？」

「あるわけないだろー」

秘密のつてなんだ秘密のつて。

そういうつてしている内に、外の奴らはドアを思いつきり叩き始めた。今にも突き破られそうなその音に、脚が震える。

……情けねえ。だが、次の言葉に俺は目を丸くした。

「警察だ！ 開ける！」

カーテンの隙間から覗くと、確かに見覚えのある制服姿が二、四人確認できる。

「おいっ、警察つて言つてんぞ？ 国からの助けじゃないのか

「たわけ、そんなわけなかろー。言つたであろー、『警察は信用できない』と。この国の警察幹部に、奴らの協力者がある。おそらく外にいる奴らにも、わたしを追つている奴らが紛れ込んでいるはずだ」

「……」

セーナは冷静に俺に爆弾投下すると、フードを着込み銃を構えた。

「お、おい何する気だ？」

「決まつてある、応戦するだけのこと。秘密の抜け道がないのだから仕方なかう。ああ、おぬしはその辺に隠れている。」

「出来るわけないだろ！　来い！　俺ん家を戦場にするなつ

もう何がなんだか分からぬ。俺はとにかく本能の命ずるまま、セーナを連れて階段を駆け上がっていた。二階の俺の部屋に入ると同時に、玄関が騒がしくなる。とうとう侵入されたようだ。

あーもうっ、お前ら捜査令状持つてんのかよ！？　せつて一橋弁護士に訴えてやるからな！

緊張と恐怖のせいで、頭がおかしくなりそうだ。だが死にたくないれば、何とかするしかない。

「おーアスカ！　おぬしどうする気だー？　これでは逃げることも

「

セーナが怒ったように叫んだ。確かにこの狭い六畳部屋には隠れるところもない。だが

「うわせえつ、とつとと來い！」

俺はリュックを背負い、一気に窓を全開にする。そして桟に足をかけると、隣の家の屋根に飛び移った。

セーナも一瞬戸惑つたようだが、すぐに続く。家中では、尋常でない物音がしていた。

俺は早くここから離れたくて、急いで次の屋根に飛び移る。そして促すように後ろを見ると、セーナが、ほくほくと嬉しそうな顔をしていた。

「おー、何してんだつ、早く行くべい」

「そりじゃ。日本の家はとても小さく、隣の家にくつついているとドクター・ケーDr.Kに言われたのを忘れておつた。このような使い方が出来るとほ、天晴れじや」

「お前… 一加多いんだよ」

そうして俺は、若十七歳にして、日本中の警察から追われる身になつたのだった。

合掌。

第四難 脱出（後書き）

今更ですが、文章間に空白があるすぎて、読みにくいと思います。
パソコンで読んで下さっている方々にお詫びします。

第五難 追手

「これから、どうすつかなー……」

俺は何となく呟いた。俺の肩には、熱が上がったらしいセーナがもたれかかって眠っている。田の前には、一面の夕焼け。

どうにか家から脱出した俺たちは、すぐにタクシーを拾い駅に直行した。そして急いで電車に乗ったのだが、前の駅で事故があつたらしく、かれこれ三十分以上停車している。

始めは焦つていらいらしていた俺だが、周りの平和そうな乗客を見ているうちに何か不思議な気持ちになつてきた。まるで、今までのことが嘘のように感じたのだ。

「全部、夢だつたらなー」

どこの国で、クーデターが起つたことも。

セーナが銃を持っていることも。

俺が、追われていることも。

「は…馬鹿みてー」

俺は苦笑いしながら、窓にこつんと頭をつけた。しかし、田に飛び込んできた景色にぎくつとする。

警察ー！

「おいつ、セーナ！ 起きるー。」

「んー何じゅ……」

「警察だつ」

飛び起きるセーナ。俺たちは傍田にも怪しげ慌て方で車両を移動した。そして警官が乗り込んでくる直前、空のトイレに駆け込む。

「乗客の皆様、『迷惑をかけて申し訳ありません。前の駅で起つている事故について説明したく……』

すると、氣の抜けのような、見るからに温和そうな声が扉越しに聞こえてきた。

俺たちを探してゐんじやなかつたのか……

俺はほつとして横にいるセーナを見るが、セーナの顔は真つ青だつた。

「おひ？ どうした」

「『』の声は、…奴らの一人だ」

「まさか。こんなに日本語きれいなのに？」

「わたしを攫つた奴らの中に、一人だけ日系人のような奴があつた。そいつだ。

確か名は……カイト」

まじかよ、と俺が言おうとした時、俺らがいる車両にそいつが入つてくる音がした。セーナと二人息を押し殺していると、ちょうどトイレの前を通ったそいつが、ぽつりと呟くのが分かる。

「ち…手間かけさせやがって」

「…」

全身に、鳥肌が立つた。
やつぱり俺は、とんでもないことに足を突っ込んでしまったのか
かもしれない。

+++++

頼むから早く向こうに行ってくれ！

俺は拳を握り締め、少しでも音を立てないように全神経を集中した。

警官の格好をしたカイトといつ奴が、先程から俺らのいるトイレの前から動かないのだ。どうやらこの中まで探る気らしい。
もちろん、トイレには窓などあるはずもなく。

「よいかアスカ。おぬしは一般人を装つて普通に扉を開けて出る。
もし奴が入つてきたらわたしが撃つ」

セーナが耳元で囁いた後、向かい合っている壁に両足をつけて登

り始める。

「な……！　おい、撃つのか？」^レは電車の中だぞっ」

同じくひそひそ声で返す俺。

銃の威力はよく知らないが、確実に音で周りにばれるだろう。つて、それより撃つか!? ^レ日本で！

「大丈夫だ。これにはサイレント機能がついてる。少し変な音がするだけじゃ」

そんな問題じゃねー！

もう一度文句を言おうと上を見るが、セーナは既に銃を構え、戦闘状態に入っていた。俺は息を大きく吸うと、ガラツと扉を開ける。

一体、どんな奴が……？　やっぱりサングラスは必須なのか！？

「……」

固まつた。

アフロだ……」いつ。

第六難 反擊

アフロ、あふろ、アフロ、あふろ……

俺の頭の中で、この単語が暴れ回つてゐる。
俺は約十秒、呆然と突つ立つていた。

ビシツと決めた青い制服、少し浅黒い肌の端正な顔立ち、溢れ出る髪の毛……
限界だ。

人目も憚らず爆笑し、慌てて前を見ると、カイトも呆然としていた。そして呻くように言つた。

「終
：飛鳥
？」

「へ？ 何で俺のこと知つて？」

「離れろアスカ！」

俺が驚いていると、セーナが前にいる奴に向けて銃を発射した。

ほひゅん……

「へ……！」

アフロが大きく揺れてその場に片膝をつぐ。

初めて見る光景に、俺は息も出来ない。撃たれたのはアフロのはずなのに、俺にも激痛が走った気がした。

「ち、外したか」

「ま、待てセーナ！　こいつ死んじまうぞ！？」

更にアフロに狙いを定めるセーナを慌てて止める。しかし躊躇する様子はなく、俺をキッと睨んだ。

「何を言つアスカ！　こいつは国を混乱に落とし入れ、わたしの友を殺した奴らの仲間だ！」

今殺らねば我らも危ないのだぞつ、掛け！」

「でも……！」

「でも俺は　！！

次の瞬間、俺の耳元で鼓膜が破れるほどの轟音がしたかと思うと、一発の弾丸がセーナに向かつてゆく。間一髪で避けたセーナだが、バランスを崩し、床に倒れ込んだ。

「セーナ！！」

ゆっくりと立ち上がる、小さな身体。

「たわけ、だから言つたであらひ。今殺らねば……我らも危ないと」

力チリ、と音がして振り返る。
嫌な笑みを浮かべたアフロが、銃を構えていた。

俺は

「感謝するゼー坊主。これでやっと任務終了だ。さあ、来るんだセーナ・ルー・キャンベラ、大統領をおびき寄せるヒサにさせてもらうぜ」

「くつ……」

セーナの顔が悔しそうに歪んだ。その瞬間、目の前が真っ白になる。

オレ、の、せ、いで。

「あああああつー！」

気がつくと、俺はアフロに向かつて蹴りを繰り出していた。俺に注意をしていなかつたためか、見事に腹にクリーンヒットする。

「ぐ……、貴様あつ」

思わず竦み上がるような恐ろしい眼を向けられるが、今は構つていられない。

俺は、すぐに啞然としているセーナの腕を掴んだ。

「ア、アスカ！？」

「とにかく逃げるぞっ」

アフロの怒声を聞き流し、俺はトイレを飛び出で、開いていたドアから外へ出た。そして線路を渡り、フェンスを乗り越えて住宅街へ逃げ込む。

「これで逃げられると思つなよつ、日本中がお前らの敵だ！」

そんなアフロの捨て台詞を、俺たちが身をもつて理解するまで、あとわづか。

第六難 反撃（後書き）

アフロを引っ張りすぎました。すいません…
それにも、広いトイレですね（笑）

第七難 逃走

「なあ、アスカ。おぬし……なぜあいつを庇つたのじゅ？」

住宅街を抜け、商店街に辿りついたといひで、セーナがぱつりと言つた。

その言葉に怒りは感じられない。ただ、心の底から疑問に思つてゐるのが分かつた。

「……」

俺が答えられずにはいると、セーナは俯いた。

「お前の知り合いだからか？」

俺は驚いて顔を上げる。

「やうじゅねーよー。あんな奴見たこともねえ。俺の方がびっくりだよ」

「やうか。では何故じゅ？」

逃げることを許さない強い瞳。俺はため息を一つつくと、纏まらまとない心中を素直に伝えた。

「よく分かんねーけど……お前に人を撃たせたくなかつた

「なに……？」

セーナが俺の顔を驚いたように見つめる。

「だから、お前に人を殺してほしくなかつたんだ」

俺が前を向いたまま言つと、セーナは乾いた声で「ははっ」と笑つた。

「何を言つておる。私は大統領の娘だ。今までにも殺されかけたことなど何度もあるし、人を撃つこともある。今更、同情などいらん」

突き放すような冷たい言葉。

だが俺は、セーナが声とは裏腹に、泣きそうな表情かおをしているのに気づいていた。

いつから、こんな生活まごにゆを送つてきたんだろう。

どんな思いで、銃じゅうを使ってきた？

どうして、こいつは…

俺は、首を少しだけ左下に向ける。

俺の胸までしか無い身長、枝のような、細い腕。

……セーナは、まだこんなに幼いのに。

「それでも…撃たせたくなかった

「……つー」

空を向いて呟くように言つと、セーナが息を呑んだ。そして一言だけ、小さな声で返す。

「…そりか」

空には、既に一番星が輝いていた。

+++++

あれから何となく無言だった俺たちだが、にぎやかな商店街を歩くうちに、他愛無い話をするようになった。セーナは活気がありますぎるような商店街が珍しいらしく、「これは何じゃ」とか、「道が狭いのう」とか矢継ぎ早に俺に話しかける。

始めはそれを微笑ましく思い対応してやっていたが、俺は、何故か嫌な予感がしていた。根拠などない。ただ、首の後ろがちりちりするように感じた。それだけだ。

俺はセーナを人混みから連れ出すると、フードのずれを直しながら小声で言った。

「おい、何か視線感じねーか？

お前ちゃんと髪隠せよ。ただでさえ目立つんだから

「奴らか！？ …いや、気配はせぬが」

「でも何か感じるんだよ。他に心当たりはねーのか？」

するとセーナは腕組みをして、大真面目な顔で言った。

「ふむ。そういうのを確か……自意識過剰と並ぶのだとロードが

「なつ、さうじやねーよ。つてまたロードかよ。」

一気に脱力感が襲う。

おつかしーな、確かにそんな気がしたんだが……

すると。

「ねえ、あなた……柊 飛鳥……君じゃないかしら」

おずおずと不安そうな声が俺の後ろから聞こえる。振り返ると、見知らぬ五十歳位のおばさんが立っていた。

「そうですが……何で俺の名前を？」

俺が聞き返すと、その人は「ひつ」と言つて数歩下がり、今度はセーナの方を向いて言つた。

「じゃあつ、あなたがセーナちゃんねー!?」

「なつー?」

田を丸ぐするセーナ。何故この人がセーナのこと……？

「あのつ」

俺が話しかけると、その人は怯えた様子で逃げて行つてしまつ。

何なんだ……？

「お、おいアスカ、これは……」

かすかに裾を引かれてセーナの方を見ると、不安そうな顔があつた。

「どうした？」

「皆が我らの方を見ておる……」

「何？」

俺が慌てて周りを見渡すと、ほんの少しの間に人がかなり集まつていた。皆、一様に俺たちを見て、何か話している。

「……ねえ、警察呼んだら？」

「……！」

不意に聞こえた声に身震いする。一体、何が起こってるんだ……！？

「つ、走るぞー！」

またもセーナの腕を掴み、人が少ない方へ駆ける。何人かが悲鳴をあげ、数人が俺たちを追つてきたようだつた。そして混乱している俺の頭に衝撃的な言葉が耳に入つてきたのは、商店街を後少しで抜けようとする時。

「……今日の午後、在日外国人のセーナちゃん十四歳が、高校二

年生で十七歳の柊飛鳥容疑者に誘拐されました。警視庁は柊飛鳥容疑者を指名手配し、行方を追っています。セーナちゃんの身長は150cm前後、金髪で白いフードをかぶっています。なお、未成年の全国指名手配は極めて異例なことであります……

「なん、だと……？」

次の瞬間、電器屋の前に置いてあるテレビに、俺とセーナの顔写真が大きく映された。

「アスカっ、これは……！」

セーナが悲鳴のような声を上げる。俺はといつと、呆然として声も出ない。後ろから近づいてくる人の気配がしても、何も考えられなかつた。

「ちっ、走れアスカ！」

今度はセーナが、突つ立つている俺を引っ張り走り出す。俺たちは全ての人から逃れるため、暗闇に向かつて走つた。

『日本中がお前らの敵だ！』

まるで呪文のように、この言葉がいつまでも頭から離れなかつた。

第八難 白夜

「ちくしょう…まだ、追つて、きやが…る!」

俺はセーナの手をぐいと引くと、細く暗い横道に滑り込んだ。もう子供が寝る位の時間なのに、周囲には人々の怒号や悲鳴が渦巻いている。

その全てが自分たちに向けられたものだとは、とうに理解済みだ。しかし、サイレンが何重にも響く音がし、汗が浮かぶ。

商店街を出てから約一時間……俺たちはひたすら人のいない方へと走り続けていた。

「おいつ、大丈夫かセーナ！」

小石に躡いて転びかけた影に向かって叫ぶ。

「…」の位平氣じや。だが、少し水が飲みたい……

「水？ ちょっと待て、そこに自販機が…」

「いたぞ!! お巡りさん、こっちこっ…うわあっ

目の前で叫んだ男の横をすり抜けながら、首の後ろを肘で強く殴る。手加減したいところだが、くたくたの身体では無理だ。

これで俺も立派な犯罪者だな…と苦笑しながら、俺とセーナは再び闇に紛れた。

+++++

「まひまひ……」、「まひまひ」、じぱりへ見つかんねーだ、る

俺は固く冷たいコンクリートの床に座り込んだ。喉と脚が悲鳴を上げてこむ。

「アスカにしては、上手く、か、考えたものじや」

「あーお前つるせえ」

俺たちは町外れにある、灯りも壊れているような小さな公園に逃げ込んだ。そしてそこにある古びた土管みたいな遊具に身を潜めた。ここなら、ひどくなってしまった雪も防げるし、警察も、まさかこんな所にいるとは思つまい。

「やうだ、ヤーナ水は…」

どうする、と後ろを向いた俺は、積もった雪を食べているヤーナと田が合つた。

「なつ……お前なー」

思わずため息。この、猿みたいに雪食つてる奴が大統領令嬢かよ……なんか涙が出てきた。

「ん? おぬしも食べるか。わたしの国には降らなんだが、雪もけつじう美味だのう」

「そーかよ…」

喉の渴きに耐えかねて、一口雪を食べて見る。涙のせいかしょっぱい味がした。

「それは酸性雨味じや」と言われ、俺が雪を吹き出したくなつたのはまた別の話。

気温はどんどん下がり、凍えそうな夜が迫っていた。

第八難 白夜（後書き）

この話がかなり短いのは、隙間？みたいなものだからです。早く次の話を投稿したいと思ってます。だらだら続いてますが、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます！！

第九難 転機

「アスカ… もむいの…」

「ああ、さみーな…」

マジで凍え死にそうだ。多少風雪は防げるとはいっても、土管の中は氷の城状態だ。身元がばれてる以上、ホテルにも旅館にも泊まれねーし、第一そんな金もない。

『今暖を取れるなら、例え刑務所の中でもよし!』的なことがほんやりと思い浮かんだ時、今まで大人しかったセーナが横で何かごそごそしてゐに気づいた。

「おー、何して… って、マジで何!? お前とつとつ自殺願ぼつつ

セーナの手刀が俺のこめかみに直撃する。

「た・わ・け。ほれ、この雪山に遭難したときの心得其の二!、『手と足の感覚が無くなつてきたら、人肌で温め合ひ合ひ』ちゃんと本にも書いてある」

「今時少女漫画でもやんねーぞそんなネタ。ちょっと見せて見つて、これ何語? 読めねえ」

「キールア語じや。ちなみに著者は

「D r · K だろ…」

「違うぞ。父だ」

「父って、大統領！？　あーもつ、親子だな…」

「ようやく理解したか。ほれ、アスカもとつと脱げ」

「出来るか…　…しゃーねーな、これでも着とけ」

俺はリュックサックから予備の着替えを出すと、セーナに投げた。セーナが大人しく着込んでいるのを見てほっとする。

「…仕方ない。見つかる危険性もあるが、大型スーパーに入り込もう。そこなら今夜、凍死することはないだろ」

「だが…！」

「トイレにでも籠つてれば、防犯カメラにも映らぬよ」

「そうか、…そうだな」

渋々頷いたセーナと共に、土管から脱出する。その時、俺のケータイが甲高く鳴り出した。

「うわっ、誰からだこんな時に俺にかけてくるなんて…」

ケータイの表示を見ると、『谷崎淳一』となっている。俺の昔の仲間だ。今更何をと思いながら、セーナに黙つているよう会団団じ、会話ボタンを押す。

「……もしもし」

「飛鳥！ 本物か！？」

「もううだけど… 何なんだよ、もつお前とは縁切つたはずだろ」「いいからいいから。それよりお前、何がつてんだよ。テレビでお前の顔見たときマジびっくりしたぜ」

「これには理由があんだけ。冷やかしなら切るぞ」

俺が冷たく呟つと、向こうは焦つたよつと続けた。

「ちがーよ、お前、今どこに隠れてんだ？ ドラセ公園とかだろ」

その言葉にびつひとつまる。……バレバレじゃん。

「なあ、俺の家にこねーか？ お前も場所は知ってるだろ。ここなら絶対わかんねーよ」

確かにあいつの家は郊外の古びたマンションの最上階だ。だが…

「どうしてお前が俺を助けよつとするんだよ。それに、マジで犯罪者かもしけねーぞ」

突然電話をかけてきて家に来いだなんて出来すぎてる。俺は強い口調で理由を迫つた。すると、電話口から静かな声が聞こえてくる。

「…後悔してんだよ。あの時、全部お前に責任なすりつけちまつたこと」

「……」

「だから、ずっとお前に謝りたかった。これで罪滅ぼしつてわけじゃねーけど……」

「『百合子』はもういいのか?」

「それは……とにかく、待ってるから。気をつけて来いよ」

「お、おー?」

かかってくるのも突然なら、切るのも突然だ。俺は電話をかけ直したが、淳一が出ることはなかった。

「くそつ、一体何なんだよ」

「『百合子』はお前の想い人か?」

待つづつにまた寒くなつたのか、再び土管の中に入り込んだセーナが尋ねる。だが俺は、答えることが出来なかつた。

「……とにかく、移動するぜ。ここからなら歩いて二十分位で着く。もう警察もいないだろ?」

「スーパーではないのか?」

「ああ」

俺があまりに神妙な顔をしていたせいか、自分の顔を引っ張り笑わせようとするセーナの頭を軽く叩き、俺は古びたマンションを目

指した。

何となく嫌な予感がするのを振り払つよつて、雪を思い切り踏み
しめながら。

第十難 拉致

「ここか？ アスカ。 隨分と汚い所だが……」

「ああ、ここだ」

俺は約一年ぶりに訪れた部屋の前で思考を巡らせていた。

本当に、隣じゃないのか？ まあ、あいつに警察の知り合いはないと思つが……

ちらりと隣の扉を見る。やはり、人は住んでいないようだ。

「どうしたアスカ？ 入らぬのか？ 中に怪しい気配はせぬ？」

「あ、ああ。分かつてる」

俺はドアを軽くノックする。インターフォンが壊れているのは知つてゐるから。するとすぐに中から淳一が顔を出した。気のせいいか、顔が青ざめている。

「……久しぶりだな。どうした？ 顔が青いみてーだけど……風邪か？」

淳一は、一年前とは想像もつかない程弱々しく笑つた。髪はぼさぼさでよれよれのトレーナー。その顔は、引き攣つているようにも見えた。

「おい……？」

「とにかく、中へ入ってくれ。話はそれからだ。……その子がセ

「ナつて子かい？」

「ああ。セーナ・ルー・キャンベラだ。よろしく頼む」

セーナが答えると、淳一はほっとしたように頷き、俺たちを部屋に入れた。

+++++

「で？ 何で俺たちを助けるようなことをするんだ淳一。誘拐犯を突き出して有名人にでもなるつもりか？」

ソファーに腰掛けると、俺は核心を突くため、わざとムツとするようなことを言った。だが淳一は、軽く受け流す。

「そんなにつんけんするなよ。言つただろ、ずっと謝りたかったつて。もうグループは解散したけど、あの事を忘れてる奴は多分いない」

「……」

「だから、謝りたかったんだ」

淳一の言つことに多分嘘はない。だが、何か引っかかるのは、俺の今の現状のせいか？

俺と淳一が二人して黙つていると、横で正座していたセーナが小声で俺に言った。

「な、なあアスカ。トイレに行きたいんじゃが…ビリにある?」

「へ? ああ、トイレなら玄関のすぐ横だ」

「わかった」

一人して、セーナがぱたぱたと駆けてゆく方を見つめる。ふいに淳一が口を開いた。

「セーナ…随分お前に懐いてるみたいだけど、どうこう関係なんだ?
本当にお前が誘拐したとは考えられないし」

俺は苦笑にする。

「まあ色々あつてな。詳しことは言えないが、追われてるんだ。」

そんなことを話していた時、リビングにある電話と子機が一斉に鳴り出した。時計を見ると、もう午前一時を過ぎている。俺は、部屋に戻ったセーナと共に、電話の声に耳を澄ました。

「も、もしもし…」

今にも倒れそうなほど真っ青な顔で電話に出る淳一。

やつぱり、何がある…。

俺は確信した。同時に、早くここを出たほうがいいと感じた。

セーナに向かって、そのままと玄関に向かつ。嫌な汗が、首をぬぐった。

「待ってください！ ちゃんと協力しますからーーー！」

受話器に向かい、気が狂ったように叫ぶ淳一。そして出ようとしている俺たちに気づくと、すごい勢いで近づき、俺の左腕を掴んだ。

「ちよつ、離せよーーー！」

「……」めん飛鳥。でも、美佳が、妹が殺されるんだ！

「なつー？」

次の瞬間、俺は足を払われ床に倒れ込む。「アスカ！」とセーナが悲鳴のような声を上げ、淳一に銃を向けた。

「アスカから離れろー！ さもないと……」

「ここまでだ

バンッ、という音がして、ドアから五、六人の男が入ってくる。セーナは信じられないという風に目を丸くした。そこにいたのは…

「アフロー？」
「カイトー！」

警官の制服じゃなく、黒いスーツを着ている姿は前より凄みを増している。

アフロはゆっくりと胸元から拳銃を取り出すと、淳一に押さえられて動きが取れない俺に向けた。

「止めるー！ アスカには関係ないーーー！」

セーナがそう叫んでアフロに銃を向ける。だが、アフロはくくくつと左手で額を押さえて笑った。

「そんなことはないでしょう。こいつはあなたを誘拐し連れました。我々の予定も大幅に狂つたんですよ」

嫌に丁寧な口調を使い、俺を冷たい目で見下す。俺は一瞬にして全身に鳥肌が立つた。息も思つよう出來ない。

殺氣だ…これが、本物の…

「ひ…く…」

何か言い返そうとするが、声すらまとめて出なかつた。

「さんざん手間をかけさせた礼に、あなたにはここで死んでもらいます」

「な、に…？」

横で淳一の「ひっ」という声がした。セーナが息を呑むのが分かる。力チリ、と音がして、俺の頭に銃を突きつけられた。俺はぎゅっと目を瞑る。

「ここまでか……

パンツという乾いた音が響き、何かが落ちたような音がした。いつまで経つても来ない衝撃に、俺はそっと目を開ける。そこには、銃を構えるセーナと驚愕の表情をしたアフロがいた。

「アスカを撃つのは許さぬ」

セーナがアフロの落とした銃を片足で押さえながら、アフロに銃を向ける。

しかしアフロは慌てる様子もなく、静かに言った。

「…さすがですね、銃を撃ち落とすなんて。やはり国で一、二を争う使い手だけはある。だが、今ここで私を殺したとしても、この人数から逃げられますか？ 外にも大勢待機させてあるんですよ」

「……」

まるで子供を諭すように言われ、セーナは唇をかみ締めている。周りの人間が、一斉に銃を構えた。

俺は、何も言えない。そろそろと、怯えたように淳一が俺から離れた。

「ああ、どうしますか？」

俺がセーナ、と声をかけようとした時、セーナが口を開いた。そして出てきた声はどこかで聞いた低いもので。

「…よからう、カイト。では、アスカたちに危害を加えるな。その代わり、わたしは抵抗せずおぬし等の元へゆく。これでどうじゅ。言つておぐが、今すぐここでもおぬしを撃てるのだぞ」

「まつ…」

「お、おー、セーナ！」

俺は急いで起き上がった。だが、再びスーツを着ている奴らに肩を掴まれ身動き出来なくなる。

一体、何を言つてるんだ…？ お前がこいつらに捕まれば、国が危なくなるんだぞ…！

「まあ、それでいいでしょう。あなたがそこまでこいつに情を移すとは思いませんでしたが。元々外国人を巻き込むのは本意ではありますんでしたし、人質も解放しましょう。では、こちひいて

「……ああ」

セーナが銃を下ろすと同時に、アフロがセーナの右手を掴み、そのまま外へ引っ張つてゆく。

俺は、それを呆然と見つめていた。

「何で、何で、何で…！ 俺は、何の為にお前を…」

「セーナ！ おいセーナ待てよっ、何のつもりだお前！ 何でアフロなんかに着いてくんんだよ…！」

自分が何を言つているかも分からぬまま、俺はむりやくむりやくに叫び続けた。しかしセーナは振り向かず、ドアの向こうに姿を消す。

「つるさい奴だ。おい、少し黙らせとけ

低い声がして、俺を押さえつける黒スーツ達。

それでも俺は叫び続けた。叫ばずにはいられなかつた。頭に浮か

ぶ、ひとつ叫んで。

俺は、また、守れなかつた……！

「ちくしょーーー！」

次の瞬間、俺の頭が硬い物で殴られ、意識が遠のく。目の前の景色
色が、少しずつ細くなり、完全に暗闇となつた。

俺は、また……

雪は、冷たい雨に変わっていた。

第十一難 残照

俺には好きな、いや、憧れてた女がいた。

「君たち、こんな所で何してるの？」

「ああ？ 何だめえ」

一年前の真夏日、建物の影で淳一とタバコを吸っていた俺にいきなり話しかけてきた女。他人をうつとおしく感じていた俺は、振り向いてそいつを睨んで…言葉を失った。

「その制服、駅前の高校のでしょ？ ダメじゃない、まだ未成年なの」

そう言ってからかいつまうに俺たちを見る女は、見たことのないような美人で。長いストレートの髪と白いワンピースが、とても似合っていた。

「て、てめえには関係ないだろ！」

思わず上ずる声。すると彼女はバックの中からクッキーの包みを取り出すと俺たちに渡し、咥えていたタバコをうつと取り上げ、笑つた。

「それで我慢しなさい」

それが、百合子だった。

+++++

「あれ？ 君この前の……」

「げ、この前のおせっかい」

「なーにーー？」

「うわつ、何す…ちよ、ちよつと淳一、早く開けろーー！」

凄い顔で追いかけて来る彼女に、慌てて俺はドアに向かって叫んだ。溜り場の一つだつた淳一の部屋の隣が一人暮らしの彼女の部屋だつたと知るのは、あれから五日後のこと。

「なあ…あんたどうして俺たちなんかに構うんだ？ 何やつてるかも分かんねーのに」

ある日俺は彼女に尋ねた。：初対面から二ヶ月程経つた頃だろうか。

普通なら、見るからな不良に声をかけたりしない。ましてや毎日のように手作りの菓子を差し入れてきたり、一緒に麻雀なんかするはずない。

あの日から突然、俺たちのテリトリーに侵入してきたこの奇妙な女は、しかし確実に俺たちに影響を与えていた。

つまらない喧嘩が減り、皆、笑うようになった。淳一のように恋心を抱く奴もいたし、あれこれ世話をやかれて迷惑そうな顔をしながらも、姉のように慕っている奴もいた。

……俺も、そうだったのかもしない。『家族の愛情』とこうも
のに、食えていたのかも、しれない。

「……弟と、似たような年だからかな。何かほつとけなくてね

俯いて、ほつと咳いた言葉。

「弟……？」

「うん、弟。一年前、病氣で死んじやったけど」

そう言って、俺を見た彼女は泣きそうな顔をしていて。俺は初めて、他人の感情を理解したいと、思った。

+++++

ゆづくこと倒れてゆく、目の前の影。

俺は必死に手を伸ばしたが、彼女に届くことはなかった。

冷たく硬いアスファルトに叩きつけられた百合子は、身動きひとつ、しなかった。

「百合子ー、おいつ、じっかりしるーー！」

淳一が青ざめた顔で立ちつくすのを横目に、俺は必死で彼女を起こした。百合子を車ではねたドライバーが、慌てた風に駆け寄つてくれる。

「百合子…? 返事しろよ… 『んな怪我くらい、どうつて』とな
…」

俺は息を呑んだ。百合子を抱き起した右手には、夥^{おびただ}しい鮮血が染み付いていた。

即死。

それは、ニュースを見ていれば毎日のように流れてくる言葉で。

でも俺は、こんなにも呆然としている。何をしていいかも、分からぬ。仲間から、何故百合子の傍にいなかつたんだと責められても、何も感じなかつた。

俺のせいだなんて、自分が一番分かつてゐる。あの日彼女を連れ出したのは、俺なんだから。

「嫌いだ……」

寂しい、葬式だった。

あいつは、天涯孤独の身だつた。親しい友人と、遠い親戚、それに俺たちだけが百合子を見送つた。

「女なんて、嫌いだ……」

自分だつて辛いくせに、いつも他人の心配ばかりして。そうして忘れられなくして、消えるのか? 何ひとつ、残さず。

女は皆、そうなのか?

ならばもう、

「俺は、女とは…関わらない」

その日から、呪文のように自分に言い続けてきた言葉。なのに、あいつが突然やって来て、俺を必要とするから。俺はもう、どうしていいか分からぬ。

「セーナ……」

未だ覚めない意識の中で、無意識に呟いた。

第十一難 残照（後書き）

本当に更新遅くなりました…
すみません（泣）
そろそろラストスパートです。
駄文ですが、最後まで読んで頂けると嬉しいです。

第十一難 父親

「やはり……だつたか」「しかし今から……まだ……」

「う……」

人のぼそぼそとした声が僅かに届く。すぐ傍に大勢の人が居る気が配がして、俺はうつすらと目を開けた。

「目覚めたかね？」

落ち着いた、心地よく響くテノールの声が、目の前で発せられる。視線を少し上げると、紺のセーターに白のスラックスというラフな格好をした中年の男が、俺の横にしゃがみ込み、俺を見下ろしていた。

「あんたは……？」

そう言い掛けた俺は、そいつの後ろを見て息を止める。そこには、黒いステッキを纏った奴らが……

「…………」

一気にフラッシュバックする記憶。俺はガバッと起き上がり、目の前の男に掴みかかった。ざわめく周囲を、その男が片手を上げて黙らせたのに気づかぬまま。

「てめえ！ セーナを、どこにやつた！？」

ほとんど圧し掛かる状態で襟首を締め上げる。しかし男は冷静な目で俺を見、言った。

「… どうか、やはりセーナは連れ去られたか。一足遅かつたようだな」

悔しそうに歪む横顔。俺は思わず目を見開いた。

「え、あんた…って、うわーっ…」

次の瞬間、俺の身体が宙を舞い、床に叩きつけられる。手加減されていたようだが、背中がかなり痛む。

一瞬で、頭に血が上った。

「ふむ。最近の日本人は受身もまともに出来ないらしいな。JYUDOを習つていないので?」

「ひるせーよ…! 何すんだ一体! ってゆーか誰だよあんた! ?」

衝撃でまだ立ち上がれない俺は、精一杯声を張り上げる。
敵か味方か分からぬいうちは刺激しない方がいいと分かっちゃいたが、いきなり技をかまされた俺の怒りは、なかなか收まりそうになかった。

「んなことしてる間なんかねーのに…! 」

俺が睨みつけると、相手の目がすっと細められる。そしてゆっくりとした動作で再び俺に近づくと、口を開いた。

「失礼した。私はトーリ・ラゼ・キャンベラー、セーナの父親だ。初めまして、柊飛鳥君。君の顔はテレビで何度も確認させてもらつたよ。ちなみに後ろにいるのは私のボディガード達だ」

近くで見ると俺より背が高く、少し髭を生やしている四十歳位の男は、転がっている俺に手を差し出しながら苦笑した。良く見ると、優しげな紳士面をしている。

「へ……？」

んな馬鹿な、とか、じゃあ何でそんな余裕なんだよとか、思い浮かんだ言葉は沢山あつたのに、俺の口から出た言葉は意外にも冷靜なものだった。

「セーナのことってことは、キールア国の大統領なのか？」

ズキズキする頭を押さえ、自力で身体を起こす。もう何があつても驚かない程度のふてぶてしさは身につけたつもりだ。すると目の前の紳士は少し驚いた顔を見せた。

「……そうか。セーナはそこまで君を信頼していたか。ならば話は早い、私はこれからセーナを助けに行く。出来れば君に協力してもらいたいのだが」

淡々と、といつよりのほほんと話すどりやうり大統領っぽい男に、俺は苛立つた。

「あんた馬鹿か！？ どうしてあいつを早く助けに行かねえんだよ！ 俺のことなんか放つといて早く行けよ！！」

周囲がぎょっとするほどの声で、俺は叫んだ。最も、何も言われないところをみると、日本語が分からぬばかりらしいが。セーナが拉致されて一時間は経っている。今も命が危ないかもしれないって時に、こいつは…！

「…本当に、セーナは強運の持ち主だな。君という存在に、随分と救われたことだらう」

「何を言って…」

俺が馬鹿呼ばわりしたにも関わらず、相手は怒ることもなく静かに呟いた。そして何と座っている俺に向かって、深々と頭を下げたのだ。

仮にも、大統領という地位を持つ男が。

「君…いや、アスカ。どうか私たちに協力してはもらえないだろうか。こここの地理に不案内で、動きが取れないんだよ」

呆然と見ている俺に、真剣な表情で、更に言葉が続けられる。

「もちろん、断つても構わない。今までセーナを助けてくれた君には感謝している。…それに、君を危険にさらしてしまうかもしれないからね」

最後の言葉はちゃかすように言われたが、それは俺が断りやすくする為だと気づいた。

それと同時に俺は口を開く。なるべく自分が真剣な顔をしていることを願いながら。

「行きます。俺を、連れて行ってください」

今度は、俺が助ける番。
あいつばかり、格好つけさせたりはしない。

「それで、いいのかね？」

迷つてなんか、いられない。

「はい」

もう二度と、失わないために。

第十一難 父親（後書き）

相変わらず話進んでません……。

こんな話ですが、読んで下さる皆様に感謝です。

第十三難 苦惱

「どうぞ」とですか！？」

俺は、黒塗りの車に向かつて叫んだ。

+++++

「ここの場所が分かるか？ アスカ」

高級そうな車の中で手渡されたのは一枚の紙切れ。無言で、殴り書きされた文字を目で追つ。

「桜山市手塚町3・5・168……あー、これって……」

見覚えのある隣町の住所に納得する。あそこはただでさえ人口密集地帯で家がひしめいているのに、最近再開発が始まり、一週間前にあつた家や道路が跡形もなく消えたりして、迷う者が少なくないといつ専らの噂だ。

「どうだ？ どの位で着ける？」

「多分、30分もあれば

「了解した。… G O -」

運転席からイエッサーという声がして、車が動き出す。俺は信号や角のたびに「次右」とか「そこ左」とか指示していたが、合間を見計らつて横に座る大統領に話しかけた。

「あの、キャンベラーさん。セーナは…その」

…ああもう！ 誘拐された子供の父親に、子供が無事かどうかなんて聞けるはずねーじゃん！！

俺は喉から出かかった言葉を無理矢理飲み込む。すると俺の様子を見ていた大統領は軽く微笑み、「大丈夫だよ」と言つた。

「え…？」

「トーリでいいよアスカ。セーナはおそらく無事だ。奴らの狙いは私の命だから、大事な人質を殺す訳がない」

「それって」

「例え、大統領である私を殺したとしても、あの国には国民が選んだ議会がある。今は混乱しているだろうが、そう簡単には潰れないだろう。…きっと」

「……やつと得た自由と民主だ。今更、奪われる訳にはいかない」

まるで自分に言い聞かせるような言葉に、俺は思わず大統領から目を逸らす。

例えすぐ隣に居ても、この人とは次元が違うんだと感じた。

それが何となく辛くて、……重くて。

「そ、そういうトーリさんは、どうして日本語そんなに上手いんですか？」

気付けばわざと明るい声で、そんなことを口にしていた。瞬間、大統領ははつとしたように顔を上げ、苦笑いする。そして何事も無かつたように、再び軽い口調で答えた。

「いや、実は日本人の親友が二人いてね。昔日本に住んでいたことがあるんだ」

「親友…ですか」

「ああ、君もよく知る人物だ。もう一人も顔くらいは知っていると思つよ。それなりに有名人だから」

「え？ 僕も知つてゐるって…」

あまりにさらりと言われた言葉に驚きながら横を見た瞬間、車が突然急ブレーキをかけ、俺は大いに頭を打つた。
涙目で頭を抱えうなつていると、大統領が運転席の人と話すのが聞こえてくる。

「どうした？」

「日本の警察です。まだ我々には気が付いていないのですが…」

「…！」

心臓がひっくり返るような動悸。俺は窓にへばりついて前方を見

た。確かに、かすかな赤色灯が見える。

大統領がため息をついた。

「……」ここまでだな。アスカ、ここをまっすぐに行って、二つ目の角を右に曲がり、橋を超えて四つ目の建物だったね？」

「は、はい」

「そうか、では君にはここで降りてもらいたい。そして闇に紛れて、元来た道を急いで引き返すんだ」

一瞬、何を言われたのか理解できなかつた。

「え……何でそんな……」

「……すまない、アスカ。だがこれ以上、君を危険な目に遭わせるわけにはいかない。それに、私は元からこうしようと決めていたんだ。……さあ、もう時間がない、早く」

まだ呆けている俺を、黒服の男たちが丁寧に、でも有無を言わさず車から降ろす。

「ど、どうこうことですか！？」

俺は閉じられたドアを叩こうとしたが、次の瞬間、俺の声を消し去るような爆音をあげて黒塗りの車は走り去つた。
続いて、何台分ものサイレンが響き渡る。

「何で……」

再び静かになつた暗闇の町で、俺は車が走り去つた方を呆然と見ていた。

第十四難 潜入

「君に協力してもらいたい」

「これ以上、君を危険な目に遭わせるわけにはいかない」

俺は、大統領発の、この一つの台詞を何度も何度も反芻し、ある結論にたどり着いた。

…矛盾してるだろ、おい。

大統領の（余計な）気遣いに、妙な怒りが湧き起ころ。何だろ？これは。まるで冒険に一人置いていかれた、脇役のようなむなしさは。

俺は近くに放置してあつたポリバケツを、力一杯蹴り上げた。そして白み始めた空の下を走る、目の前の道路を睨みつける。

「ここは俺の国、俺の町だ。あんたら部外者に命令される筋合いはこれっぽっちもない！」

そうだ、何を躊躇つているんだ。俺は、何のためにここにいる？

俺はぐつと足に力を入れると、全力で走り始めた。雪を踏みしめる音がし、俺の息は白く染まる。もう捨てたと思っていた、不良の血が騒いだのかもしれなかつた。

テリトリーを守ろうとする、野良猫のよう。

+++++

「ようこそ、Mr. president。ここまでお越し頂き、感謝しますよ」

カイトがその口調とは裏腹に、歪んだ笑みをトーリに向ける。トーリは静かにため息をついた。

「出来れば君とはこんな形で会いたくなかったよ、カイト。…そして、マハグ元大臣」

「おや、私はまだ大臣ですぞ。まあ更にひとつ地位が上がるのも間近ですが」

カイトの横の椅子にどっしりと腰掛けた、いかにも脂ぎっている男は、トーリに見下した目を向けた。

もう使われていない古びた廃屋の最上階で、一国の運命を握る話し合いが続く。

「单刀直入に言つ、今すぐ全ての悪事から手を引け。…これ以上母国を虐げるのは止せ」

「はつ、今更何を言う。外国の圧力に負け、民主とやらを選んだ結果がこれだろ？…俺はあんたを許さない、養父を殺したあんたを！！」

カイトが鬼気迫る表情で、トーリに詰め寄ると胸倉を掴んだ。

+++++

どういう、ことだ…？ 大統領が…殺し？

俺は無事に建物までたどり着くと、苦笑した。全く、何で今日はこんなに過去を思い出すことばかり続くんだろう。ここは、元、溜り場の一つじゃないか。

この場所なら、隅から隅まで知り尽くしている俺にとって、侵入は簡単だった。つまり、中に入らなければいい。俺は所々突き出している釘や出っ張りを足掛けにして、慎重に壁を登った。

そして最上階である4階の窓枠に手をかけた瞬間、怒号が聞こえ、俺は咄嗟に身を屈めた。

幸い、小さなベランダらしきものがあり、足場には困らない。しかしアフロの怒声は更に続く。

「あの人は、親に捨てられ身寄りの無い俺を、家族同然に扱ってくれた！ それをあんたは、あっさり切り捨て死に追いやったんだ！」

中の様子も分からぬのに、アフロが泣いているのが分かった。次々と、キーラア国の過去が暴かれてゆく。

民主制に移行した当初の混乱、相次ぐ官僚の不正、大臣の汚職、罷免された大臣の、自殺。

「彼は確かに優秀で潔癖な人物だった。だが、彼は欲に負けた。大金に目が眩み、他国に機密を売り渡していた。…決して許されることはない」

あくまで淡々と、大統領は語る。

「嘘だ！ あの人人がそんなことをするわけがないっ、お前がはめた

「んだろ？…」

その悲鳴のよくな声と同時に、銃声が響き渡る。俺は隠れていることも忘れて窓に張りついた。

アフロの手に拳銃が握られ、そこからかすかに煙が出ている。しかし平然と立っていることからして、大統領に怪我はなさそうだ。

そうして何気なく、アフロとどぶい人がいる場所の後ろに視線を移した俺は、目を丸くした。

セーナ！！

つい数時間前に別れたばかりなのに、安堵で涙が出そうになる。セーナは、大統領側からは布で遮られているため互いに気付いていないが、大統領親子の間の距離はわずか数メートルだ。

しかしそんな悲劇的な状況でも、セーナは変わつておらず…

両手両足を椅子に縛られ、猿轡を噛まされているそんな時でも、精一杯脱出しよじとまるで軟体動物のように体を動かしていた。

「くっ…く…」

思わず小さく笑いが漏れる。幸い怪我もなさそうだと判断した俺は、もう一度慎重に辺りを見渡した。

足元には、武器にもなりそうな細いパイプ。意外にも、双方の黒服の姿は見えない。

そしてセーナのいる場所の真上には…排気口。

いける。

俺は再びしゃがみ込むと、排気口の入り口を探し、潜り込む。もちろん、長年使用されていない中の様子は、人間の言葉じゃ言い表せないような惨状だつたけれど。…男は、度胸だ。

数分後、やつとの思いでセーナの真上まで登つた俺は、くもの巣だらけの蓋の隙間から下を覗き込んだ。セーナの金髪が見え、再び話し声が聞こえる。しかし、今度は嫌に野太い声 でぶい奴だ。

「カイト、これ以上話しても無駄だ。大統領、私はあなたと昔話をするためにここにいる訳ではない。今すぐに、あなたの権力、地位、財産を譲ることを承諾しなければ、命の保障は出来ない」

「黙れ、國を裏切つた者に、何もいう権利はない！ 私の権力、地位は國民によつて『えられたものだ。貴様などにやれるはずがないだろう！」

あのジョンナルマンな大統領が声を荒げている。怒るのは当然だ。だが、事態は確実に悪化している。

「…ほう、ではあなたは、実の娘でさえも見殺しにする?」

「… セーナがここにいるのか!? 貴様、私が来れば解放すると言つておきながら…」

「ははははは、これはおかしい！ 私をクーデターの首謀者扱いしておいて、正攻法を信じているなど！ ちなみにあなたの部下は別室で寝ていますよ…永遠にね」

「くつ、セーナ、どこだセーナ…！」

「んんんんん～～～～！」

セーナが必死でもがく。

俺は息も出来ず下を眺めているしかなかった。

どうすればいい！？　この細長いパイプ一本で、何が出来る！？

親子を隔てていた布が除かれ、一人の視線が合つ。セーナに駆け寄る大統領、…そして。

「…殺れ」

この言葉を合図に、別室からぞろぞろ出てきた周りの黒服から、一斉に銃口が向けられる。

「止め…！…」

俺は最悪の状況を前に思わず身を乗り出す。しかしその瞬間、足元で嫌な音がしたかと思つと、底が外れ、銃口の中心地へ吸い込まれるように下に落ちた。

言つまでもなく、俺も。

「げ」

今度こそ、死んだかも。

床まで落ちるコンマ数秒の間に、走馬灯を見た、気がした。

第十四難 潜入（後書き）

皆日本語で会話しているのは、気にしないでください…

第十五難 疾走

落ちる……！

俺は衝撃を覚悟し、固く目を閉じた。一瞬後には、まるで雷が落ちたような爆音がし、周りから悲鳴が上がる。

「アスカ！？」

セーナの驚いた声が、した。

+++++

「……あれ？」

銃声がいつまで経つても聞こえないのに気付き、そろそろと田を開ける。恐る恐る前後を確認するが…誰もいない。体中が打撲で悲鳴を上げるが、構っているヒマはなかつた。

どうなつてんだ？

「アスカ！！」

え。俺が声のした方 上を見上げると、穴の開いた天井から、セーナの顔が覗いている。

「セーナ！ お前、何で上……に……」

違う。景色が違う。俺はようやく理解した。俺は…床をぶち抜いて下の階に落ちたんだ。普段なら爆笑ものが、今は感謝するしか

ない。おかげで、大統領親子に対する攻撃も中断されていくようだつた。

俺はセーナに向かつて叫んだ。

「セーナ！！ もこから飛び込め！ 早く！」

「ア、アスカ！？ しかし…と、父様！！」

いち早く察したのか、大統領がセーナを抱えて飛び込んでくるのが見え、俺は慌てて飛びのいた。

スタッフ、と見事な身のこなしで降り立つたジェントルマン。映画の中では拍手喝采だらう。ただし、お姫様抱っこされている金髪の美少女が、椅子に縛り付けられてさえいなければ。

「アスカ！ とにかくここを出るぞ！－」

すばやい動きでセーナの縄を解いた大統領が叫ぶ。言われるまでもなく、俺は頷いた。ようやく我に返つたらしい黒服が、穴から銃を向けたのが分かる。

「こっちだ！」

隣の部屋へ続くドアを抜け、内側から机や椅子、ボロボロのパソコンや機械でバリケードを作る。そして廊下へ出て階段を降り、脱する。

単純だが完璧な方法のはずだった。しかし…

「アスカ！ 下から奴らが上がつて来るぞ！」

「何だつて！？」

今にも駆け下りそうだった足をすでのところで止める。確かに、大勢の足音が近づいて来ていた。

「味方じゃないのか！？」

「「ない！」」

親子そろって断言される。ビーする？ ビーするよ俺！？
パニくるあまり意味もなく歩き回る俺。その時、鮮やかに甦った、なつかしい記憶。

なあ、飛鳥。あの建物、屋上があるの知ってるか？

はああ？ 何言つてんだよ淳一、そんなものねーだろ屋根があるんだし

いや、外からは分かんねーけどあるんだよ。まあ、屋上つて言つても狭いし、見えるのは隣のビルくらいだけどな。行き方は…

「…屋上だ」

「アスカ？」

「屋上に行げー！ ついて来い！ あ、いや、ついて来てください」

仮にも大統領に向かつて、命令形はないだろう。俺は慌てて言い直し、方向転換した。そして二人が来るのを確認し、一見倉庫にも見える非常扉をこじ開ける。一気に、冷たい風が入り込んできて、身震いした。

田の前には、人が一人やつと通れるほどひびきつた外階段。

やべえ、これマジで壊れそう。上ったら天国行けそり…

自分の想像に思わずしり込みするそんな俺の前で、親子がとどめの一言を吐いてくださった。

「ほらセーナ、これが二ンジャも愛用してこるナワバシゴだ
「まうまう。日頃から危険な訓練を積んでるのじやな」

うつづくよー！

第十六難 危機

「くそ…、あもつゝ、開かねえ…」

情けないこと、セーナの服を軽く掘みながらくたどり着いた屋上…の扉の前。

見た目からして頑丈すぎるこの扉は、押しても引いてもびくともしなかつた。カギだ、カギがかかってるんだ。

おやくそく

そんな言葉が脳内に浮かび、俺は頭を抱えた。仕方ない、ここは諦めてこんなヤバい階段から、一刻も早くおさらばしよう。このままだや、敵に見つかる前に、じき臨終してしまつ可能性もある。すると、しゃがみ込んだ俺の両肩にぽんと手が置かれた。

「へ？」

「どいてなさい、アスカ」

「アスカ、邪魔だ」

振り返った俺が見たものは、嫌に黒光りする銃を持つ親子の姿だった。

ぎやああああー！

+++++

「し、信じらんねえ…」

一体どこから出したのか、見事な銃さばき＆「ラボレーションで、扉の力ギギどころか扉そのものをぶち壊した二人を代わる代わる見る。哀れ、扉だつたものは、無残にも床に転がっていた。

そして、俺はようやく気が付いた。

この親子は、加減を知らない。…気がくの、遅…！

「あの～これから、どうします？ 正直言つと、ここから何も考えてないんですけど…」

思わず敬語になる俺。セーナが、「なに～！？ 考えとらんのか！」という容赦ない突っ込みを入れる。しかし大統領は、銃を懐にしまいながら軽く微笑んだ。

「ああ、大丈夫だよアスカ。もつすぐ助けが来るはずだ、どこかに隠れていよう」

「助け、が来る？」

「ああ、それも強力な助つ人がね。だから…」

「パン…！」

乾いた音。続く、一瞬の静寂。

「父様…！」

目の前で、まるでスローモーションのように倒れてゆく大統領。セーナの悲鳴が、遠くに聞こえた。

「何…」

大統領を支えることも出来ぬまま、呆然と見つめる俺。だが、大統領が視界から消えた瞬間、入り口にいるアフロの姿を捉えた。不敵にも、にやりと笑うアフロ。

「カイト、貴様…許さん…！」

地を這うような声で言つたセーナが銃を構え、アフロはセーナに銃を向ける。

相打ち…！ その言葉が思い浮かんだ時、俺は無我夢中で持っていたパイプをアフロに投げつけ、セーナに向かつて走り出した。

「アスカ！？」
「来い…！」

カイトが顔をかばつて体勢を崩すのを横目に、俺はぐつたりした大統領をどうにか抱えて屋上の隅へ走った。どこか、片手でセーナの腕まで引っ張つている。火事場の馬鹿力というものは、実在した！！

建物の影に隠れ、アフロの視覚からどうにか逃れると、俺はすぐさま遙か下の道を確認した。隣のビルとの間にある薄汚い小路のため、人通りはない。

俺は必死で目を凝らし、ある物を探す。思つたとおり、そこには、数年前とほとんど変わらない光景があつた。

「セーナ、飛べ！ 早く…！」

俺はセーナの背中を押し、大統領をしつかりと抱ぎ上げた。

「ど、ど！」ぐじゅー？　天国はまだ早いぞ！…」

青褪めた顔で反論するセーナ。銃には顔色ひとつ変えないくせに、
高いのは苦手らしい。

「分かつてるとよつ、死にたくなかつたら 飛べ！！」

俺のどこにそんな思い切りのよさがあつたのか分からぬ。ただ、
俺がセーナを無理矢理引っ張り、大統領を抱えて廃屋の屋上から飛
び降りたのは確かだつた。

成功確率？

そんなの、知らねーよ。

第十七難 負傷

息が、出来ねえ……！

背骨を中心に襲つ、凄まじい痛み。

さつき排氣口から落ちたのとは次元が違う、氣を失いそうな衝撃。

俺は、必死で耐えるしかなかつた。

+++++

「げほっ、ぐつ……！」

自分が激しく咳き込む音で、覚醒する。全身がバラバラになりそうだ。一瞬頭が朦朧もうろうとするが、横を見て一気に血の気が引いた。

「セーナ！！ おいつ、しつかりしろ！」

セーナはびくっともせずに、横たわっている。慌てて呼吸を確認し、どうにか生きていることが分かつた。

「セーナは……無事かね？」

俺の横で、同じく体を打ち付けられた大統領が掠れた声で呟いた。俺は急いで駆け寄り、助け起こそうと肩に手をやつた。

しかし俺の手は、あつと言ひ間に血に染まる。

「血……？ あの、これって……！」

「心配ない、銃弾の傷だ。貫通しているし、もう痛みも感じないよ。それより、セーナは？」

「あ、はい。セーナは無事ですが… 田覚めなくて。ほんとにすいません…！俺がこんなことしたから…」

俺は勢いよく頭を下げた。今にも追手が来そうな状況で、こんなことをしている場合じゃないかもしれない。でも謝らずにはいられなかつた。セーナがこのまま田覚めなかつたら？ 田の前が真っ暗になる。

「君が謝る必要なんてない。むしろ感謝しているよ。おぼろげながらも、君たちの会話は聞いていた。… じゃ、『』捨て場かね？」

「…はい」

つまりこうだ。この廃屋の隣には、タイヤ工場がある。そのせいでこの道にタイヤが大量に投棄されているのだ。誰も片付ける奴なんかいねーから、必然的に、量は増えていく。今では一軒家並みの山になつていてるやつに、俺たちは飛び降りた。

だが、やはりタイヤは固く、ダメージは計り知れない。生きているのが不思議なくらいだった。

「アスカ、セーナを起こしてくれ。早くここから出なければ

大統領が、右腕に布を巻きつけながら俺に言った。

「でも、脳震盪とか起こしてたら…」

「セーナには柔道も教え込んである、受身は完璧なはずだ。ここで捕まれば、命に関わる」

「は、はいっ、セーナ、おいつ、大丈夫か？」

大統領の言つとおりだ。俺はセーナの頬を軽く叩いた。幸いにも、反応が返つてくる。

「ん～～～？」

「おいっ、大丈夫か！？ 起きろ！」

「…………… わい」

「え？」

「ゴムくさ！」

…そりやそうだ。辺り一面泥と雨水まみれのタイヤばかりなら。俺は笑いがこみ上^{アツ}げるのを我慢して、今度は強めに頭をはたいた。

「起きろセーナ！ 早く逃げッぞ！」

「うおっ、ア、アスカ！？ 私は…」

未だ状況が飲み込めていないセーナをゆっくりと立たせる。

「どうか痛いとこねーか？ 走れるか？」

「走れるが… 全身の骨が痛いと言つておる」

「や、そつか、何とかなるだろ。大統領！ オッケーですっ」

大統領が頷くのを確認して、とりあえずこの不安定な足場からの脱出を試みる。やつとのことで平坦な地面に足を着けた時、後ろを歩いていた大統領が俺に尋ねた。

「アスカ、この辺に、屋上がある高い建物はないか？ 出来れば広い方がいい」

「え…？」

「助けは、空から来るんだよ」

その言葉はイマイチ（というか全く）理解出来なかつたが、俺が咄嗟に思い出したのは学校だった。確か近くに、5階建ての中学校があつたはずだ。

「ユーハーです！ セーナ、行くぞ…！」

今まで後遺症のせいいかほんやりしていたセーナだが、やつと思いついたようで、何やらぶつぶつ言つている。俺はまたしても腕を引き、大統領に向かつて合図すると走り出した。しかし。

「マジかよ…」

ようやく校舎にたどり着いたとした時、一台のパトカーが前を横切り、急停止した。

「容疑者発見！ 繰り返す、容疑者発見！ 応援求む！…」

警官の一人が大声で無線に叫び、もう一人が銃を持つてじりじりと近づいてくる。

すっかり、^{あんたら}警察の存在忘れてたよ…

「…うざいのー」

セーナがぽつりと言った言葉に、俺は大いに賛成した。

第十八難 決着

「あのー、囮まれちゃいましたけど…」

「ああ、その通りだアスカ」

「うむ。その表現がぴったりだな

ナラジやなくて…！」

+++++

俺たちは、今校庭のど真ん中にいる。
二十人位いる警察官は、俺たちの田の前にいる。
親子は俺の、横にいる。

やばいよな～何かもつ危機感とか無くなってきたけど。

そんなことをぼんやりと考えていると、太った警察のおひちゃん
が、拡声器で俺たちに向けて叫んだ。

「おーーーー！ 被害者の方たちへ無事ですかー？」

そんなもん無くても聞こえるだろーが。…ん？ 被害者？

「被害者って、誰だ？」

俺は後ろで仏頂面をしているセーナに尋ねる。

「知らん。皆被害者だ」

言われてみればその通りだ。…俺が一番被害を受けてる気がするが。

「柊 飛鳥一、大人しく銃を捨てて投降しろー」

俺かよ!? しかも銃を持つてるのは俺じゃなくて、あんたらが被害者扱いしているこの親子だよ…!

俺が自分が指名手配されているのを思い出し、大声で全部ぱりしがい衝動に耐えていたとき、またしても爆弾が投下された。

「投降しない場合は一射殺命令も受けているーー」

「げ、マジー?」

「マジである!」

間の抜けた声とは裏腹に、警官達はすばやく腰のフォルダーから拳銃を取り出し、一斉に構えた。

もちろん、俺照準で。

「ちょっと、待…」

「のままでアフロたちに追いつかれる前にオダブツだ…!」

俺が慌てて両手を挙げて、戦う意思がないことを分からせようとしたり、ふいに右手が掴まれ、下ろされた。

「時間だ」

「え…」

大統領は、空を見て嬉しそうに言った。セーナと俺もそれに続く。
かすかに、音が聞こえた。

パラパラパラ……

何の変哲もない、毎日のように見る景色。
朝日の中、一機のヘリが近づいて来る。

「いたぞっ、捕まえろ！…」

とうとうアフロの声が聞こえた気がしたが、ヘリの音で何も聞こ
えない。俺があっけにとられていると、その黒いヘリは俺たちのす
ぐ傍に降り立つた。風で砂埃が舞う。そして一

「我々の、勝利だ」

大統領は、それは優雅に、笑った。

+++++

ヘリのドアが開いた瞬間、一気に黒い影が数人飛び出した。その
人々は俺たちを庇うように前に立つと、拳銃とは比較にもならな
い位の重装備でアフロや警官を威圧する。背中には… S A T ! ?
警官は訳が分からぬいらしく、物凄く焦っていた。安心しろ、俺
も全く分からぬ。

そんな馬鹿な、だつて、俺は警察に追われて…

俺の脳は、パンク状態だ。その時、ヘリの中から、マイクで声が響いてきた。

「警告する。本件はこれより、特殊機動部隊の管轄下に入った。各警官は、すみやかに持ち場へ戻れ。…これは、首相命令である」

「しゅ、首相！？」

俺は思わず叫ぶ。ヘリからゆづくりと降りて来るのは、俺でも知ってる超有名人、高里首相だ。小さな悲鳴が聞こえて後ろを見ると、息も絶え絶えなアフロと一緒に拘束されているところだった。

あっけねえ…

俺つて一体…訳も分からず落ち込む俺の前で、大統領と首相が抱き合ひ。肩書きで言つと、かなりすごい感じだ。

「遅れてしまなかつた、トーリ。無事だつたか？　すぐに病院を手配する」

「いや、時間通りだ。助かつたよコウイチ

「すまないな、警視総監がまさか向こうつと繋がつていたとは知らなくてな、即刻処罰したよ」

もう60を過ぎている高里首相は、初めてほつとしたように、微かに笑つた。

「どうして首相シヤツがここにいる…？」

信じられないというように、拘束されているアフロが叫ぶ。大統領はどこか苦しそうに言つた。

「私の交友関係を把握していないからだ、馬鹿者め。…何故、私がお前を国外追放したのか分からぬのか？　まだ若いお前が、新しい人生を歩めればいいと…」

「黙れ！…　何と言われようと、俺の国はひとつだ！」

「… そりやか」

無表情だが、少し嬉しそうな顔で大統領は呟く。

「どうする？　この者たちは日本でも裁くことは出来るが…」

高里首相が提案する。確かに国内が大変な状況になつてゐるだろうキーラアに、犯人を連れ帰つても、余計混乱するだけだろう。しかし大統領は首を横に振つた。

「いや、ユウイチ、連れて帰るよ。皆キーラアの国民だ。また面倒をかけるが、手配してもらえるか？」

「仕方ないな。さて、もうすぐ子供たちが登校してくる時間だ。ひとまず撤退しよう。セーナちゃん、飛鳥くん、君たちも乗つてくれ」

まるで返事を分かつていていたように、やれやれと高里首相が首をすくめた後、俺たちに声をかける。ヘリに乗るのはかなり気が引けたが、俺はとりあえず頷いた。セーナに続いてこわごわと乗り込む。

友人ってのは、首相のことか…でも、だとしたらもう一人は？俺も知つてゐる…

そんな疑問は、座席に座つた俺の後ろから聞こえてきた声で吹き飛んだ。

「よつ飛鳥。色々楽しんだみてーじゃねーか」

「お、お、叔父貴！ 何でここに…？」

「おおDr・K、久しゅう。まだ生きておつたか

はあああああー？」

「よ、セーナ、どうだ初めての日本は？」

何ヶ月振りかに見る叔父貴は、口をパクパクさせている俺に構わず、「旅行楽しんだか～？」というよつな軽い口調でセーナに話しかける。

「それなりに楽しかったぞ。さすがDr・Kの国じゃ

た、楽しかつたつて…楽しかつたてえええー？」

「お、おこどりうことだよー？ Dr・Kつて…」

「あーばれちまつたか。まあ、俺は昔からあいつのダチでな。あいつに頼まれてセーナに日本語教えてたんだ」

マジかよー？ それじゃこのおっさんは、エベレストとかナイア

ガラの滝に行くとか言つといて、キールアで出稼ぎかよ！

… そういうや叔父貴が登山道具とか持つてゐるの、見たことねえ！

気づかなかつた自分に悲しくなる。

「じゃあ、くつてのは…」

柊 圭太郎

「おーじーきー！ セーナに変な日本語とか、間違つてゐる常識教えんじやねえ！！」

俺はすべての元凶に詰め寄る。だが、相変わらずの飄々ぶりだ。
「いやーしかし、セーナが日本に行つたとは聞いたが、まさか飛鳥に会つてゐるとはなあ」

「つむ。私も驚いたぞ、名前は同じだと思つておつたがな」
もつ、どうにでもしてくれ。

俺は、はははと力無く笑うことしかできなかつた。

第十八難 決着（後書き）

次が最終話です！
読んでくださる方、本当に感謝しています。

第十九難 最高の別れ？

忘れられる訳がない。

こんな、衝撃的な一日を。

+++++

翌日の朝早く、俺は首相と共に、どつかで見たような黒塗りの車で空港に向かっていた。叔父貴は相変わらず行方不明だ。

「すまなかつたね飛鳥くん。君を指名手配させるめになってしまった。何と謝ればいいか分からんが…」

横から聞こえた神妙な声に、俺は慌てて首を振った。

「い、いいえ！ それ位どうってこと…ある…けど…」

『それ位』のはずがない。俺の携帯は、たった一日で三ヶ月分以上はあるだろう受信メールを押し付けられていた。家の電話もあまりにもうるさいので、受話器を上げっ放しだ。

そして、俺やセーナのことは、あれから一切報道されていない。間違いでした、とも、事件は解決しました、とも。

「もちろん君のために、あの報道が誤りだったことを何度も放送したい。だがそれでは…」

「分かつてます。首相が国交も結んでいないキールア国に協力した

「…」
「…」

俺がそう言うと、首相は驚いた顔をして俺を見た。
……失礼な。俺
だつて学習するんですー

「その通りだよ、飛鳥くん。正直、『無かつた』と『にしたい』とい
うのが本音だ。下手に弁解するより、忘れてもらう方が都合がいい。
最低の首相だね、私は」

苦笑する首相。その自嘲的な笑みが何故か大統領と重なり、俺は思わず叫んでいた。

「俺は全然平氣です！ それに、その、全部『無かつたこと』なら、首相が落ち込むのはおかしいんぢやないですか！？」

「うわ、何か変なこと言つちまつた！ しかも首相に向かつて、「おかしい」とか言つちやつたよー？」

俺の頬を冷や汗が伝う。しかし首相は、一瞬ぽかんとした後、大声で笑い始めた。

「は、ははは……最高だよ飛鳥くん！ そうだな、全部無かつたことだな。いや、すまない。もつ君には驚かされるばかりだよ」

「そ、そればジーや…」

とりあえず、一件落着か…？　俺はまだ笑い続けている首相を横目に、そう思った。

+ + + + +

「アスカ、来てくれたのか！ 天晴れじゃー！」

空港に着くと、相変わらず変な日本語で叫びながら、セーナが駆け寄つて来た。空港と言つても、田舎の小さな空港で、俺たちの他人は見当たらない。そしてセーナも、昨日の印象とは随分変わっていた。

「どうじゃアスカ。この格好、変ではないかの？」

俺の前で、セーナがぐるりと回る。黒色のワンピースに、黒の靴、そして対照的な白色のコート。黒に金髪が映え、はつきり言つて昨日よりずっと大人びて見える。思わず言葉に詰まつていると、セーナが悲しそうに言つた。

「…キーラアでは、犠牲者がたくさん出たからな。追悼の意味で黒を着たのじゃ。ほら、父様も」

「え…」

そういうことを言いたかつたんじゃなくて…

しかし結局何も言えずにセーナの示す方を見ると、確かに全身を黒で包んだ大統領が佇んでいた。そして、白いセスナの前で首相と話した後、こちらに向かつて軽く手を振る。

「セーナ、出発するぞ。いいか？」

心臓の鼓動が早まる。これが、もう最後なんて信じられなくて、俺は思わずセーナの手を掴んだ。

「アスカ？」

「あ、いや、その、気をつけろ……よ？」

何言つてんだ、俺。

助けてすぐに銃を向けられて、散々ヤバイ奴らから逃げ回るはめになつて、あげくビルからダイブして。擧げればキリの無い悲惨な一日。…のはずなのに、何故か俺はその元凶を引き止めてしまったらしい。

拾つた猫に愛着が湧くつてやつか…？

俺が自分の行動に戸惑つていると、ふいにセーナが俺の両手を掴み、一言、「小さくなれ」と言つた。

…しゃがめつてことだよな？ 俺が言われたとおりにしゃがんだ瞬間、額に触れる、微かな感触。セーナが、してやつたり、という笑つた。

「また会える、まじないじや」

「なつ…、お前、何！？」

「ふふふふ、日本人はつぶじやのうー、ドー・ドーの言つたとおりじ
「や

「~~~~~!!」

後ろで大統領と首相が笑っている。俺は一息ついて怒のを我慢し、言つた。

「頑張れよ」

「無論じや」

短い会話。だけど、それだけで十分だった。おそらくもう会ふことは無いだろうが、これが俺たちには似合いだ。

出会いも突然なら、別れも突然だった。

「じゃあな、アスカ」

「ああ」

俺は、セーナが機体の中に消えるのを、黙つて見送った。

+++++

一ヶ月後、つい最近物凄い一日を経験した俺は、何をする氣にもなれずぼんやりとテレビを見ていた。もちろんキールア国のことは何一つ報道されていないが、あの国の様子を、近隣の国の様子から少しでも知れればと思ったのだ。そんな時、電話が勢いよく鳴り響き、俺はしぶしぶと受話器を取る。

「はい、柊……」

「おー飛鳥くん！ 元気かね？」

「た、高里首相！？ 何で、お、叔父貴なら今いな……」

俺はぎょっとして受話器を落としそうになる。だが、電話の相手は楽しそうにとんでもないことを言つてくれた。

「突然すまないが、君を今度の対キールア国友好大使に任命しようと思つてね。引き受けてくれるかい？」

「は……？」

「私の在任期間も僅かだが、最後に念願だつたキールアとの国交樹立を達成できそなんだよ！　もうあの国も随分体制が整つたみたいだしね。いやいや、心配することはない。君はあの国でも十分有名人だ」

「……」

ああ、俺の人生は、どこから狂つてしまつたのか。

「おーい、飛鳥くん？」

気が遠くなるのを感じながら、俺は、俺のささやかだが平凡な人生に、終わりが告げられたことを思い知つたのだった。

完

第十九難 最高の別れ？（後書き）

まずは、最後まで読んで下さった皆様に、感謝の気持ちでいっぱいです。皆様のおかげで、何とか完結できました^_^
次は、無謀ながらも、歴史ものに挑戦したいと思つています。興味がある方は、どうぞまたお付き合いくださいませ。
本当にありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4773b/>

デンジャラス・ガール

2010年10月10日22時12分発行